



今日も街は静かだ。午後三時、よく晴れて気持ちの良い天気だが、出歩く人の姿はない。人々は眠っている。可能な限り長い時間を、人々は眠って過ごす。

高度に発達した信用社会では、何をするにも、どう考えてそうしたのか、ということが重視される。創作はもちろん、日用品も、サービスも、食品も、提供者がどのような考えでそれを提供しているのかが最も重要であるし、それは消費者も例外ではない。どんな意図でそれを購入するのか、利用するのが常に問われている。

反社会的、非道徳的な考えを持つ者と少しでも接触しようものなら、社会的信用に重大な影響をもたらしてしまう。危険な思想との関わりを断つことが自身の信用を保つために不可欠である。裏切りが最大の悪徳だ。裏切らない、裏切られないための有効な手段として、ほとん

どの人が起きている間中、自身の思考を常に公開し続けるパブリックディスクロージャーというネットワークに接続している。こうしておけば、自分に不適切な思考がないことを表明できるし、他者がどのような思考を持つているかも確認することができる。

ネットワークの利用によつて犯罪率が著しく低下したこともあつて、ネットワークに接続していないということが既に、公開できないような思考の持ち主であることの証明として受け取られるようになった。今やパブリックディスクロージャーの利用なしに、他者と関わりを持つことは考えられないことである。あらゆる不徳を退け、清廉潔白で公明な人間であり続ける努力は並大抵のものではないが、信用のためならやむを得ない。自律心は社会参加の前提条件なのだ。

このような生活で唯一残された最後のパーソナルな領域、それが睡

眠である。夢は自分で制御することができない。自律の適用範囲外だ。

その日どんな夢を見るかは誰にもわからない。夢を見ている間だけは何に縛られることもない。なるべく楽しい夢を見たい、夢の中で自由を過ごしたい、そういう人向けのサービスが開発されたこともあつたが、サービスによつて制御された夢はもはやパーソナルとは言えない。夢を制御しようとする人は反社会的分子とみなされ、そのようなサービスも全て駆逐された。

人々はただ眠っている。良い夢を見る日もあれば、嫌な夢を見る日もある。不自由で制御不能な夢に翻弄されているときだけ全てから解放され、完全な自分であることができるのだ。